アウトロウ半歴史

小生30歳。幾多かりし日の退屈な風貌。

平野威馬雄

もうやめた二人の女優（東映、宝塚星組）を何か親切にしてやった時の記念。

アウトロウ半歴史

発行　昭和五十三年七月一〇日

著者　平野威馬雄

発行者　矢崎泰久

発行所　株式会社　話の特集

東京都渋谷区神宮前四―三〇―六―七八九　郵便番号一五〇

電話（四〇五）〇八一〇

製版印刷　株式会社　大竹美術

製本　小泉製本株式会社

© 1978 Imao Hirano

落丁本、乱丁本は本社にてお取替えします。

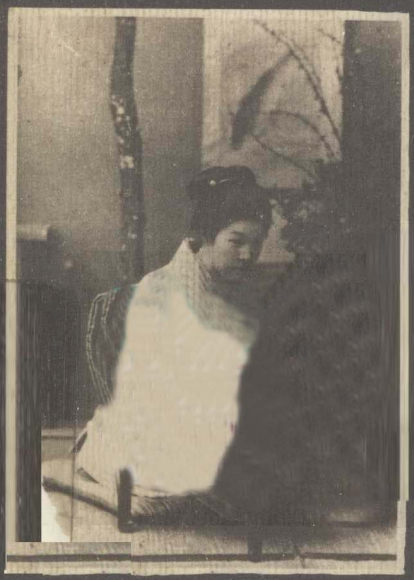
アウトロウ半歴史

小生30歳。幾多かりし日の退屈な風貌。

平野威馬雄

もうやめた二人の女優（東映、宝塚星組）を何か親切にしてやった時の記念。

左レミ(6)妹ミカ(4)



母、20歳の時ゆえ、明治23年。

定価一四〇〇円
0076-9020-6974
話の特集

アウトロウ半歴史　平野威馬雄

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目次

墨田堤の脂肪の塊……9
教会から追われて……32
ストライキ終えて、くびになること……55
父を奪った女……82
ハダカの聖夜……97
異人のおわい屋……112
死刑を言い渡された気持ち……128
女の匂いのする兵隊……136
高村光太郎の抒情詩的エピソード……153
『真白き富士の嶺』を焼くこと……161
月に吠える仲間たち……176
文学少年サトウハチローのこと……189

折伏されて本を出す……207
鳥にも国籍があるのか？……216
青宋は清掃にも通じ……225
湖畔の天使園とは……237
真空地帯の影……243
アメ横の晋太郎の人殺し……262
ぼくには不似合いなことが二度……293
詩の世界では……307
しめくくり、差別のこと……326
そして、ぼくの生まれにからむ、いやな伝説……340
あとがき……352

装幀＝横尾忠則

墨田堤の脂肪の塊

「ああ、やっと殺されずにすんだ……」
赤羽の憲兵隊支所の牢獄から、とつぜん、
「帰っていい」
と、呼び出された。
ぼくは、もう、魂のぬけた空(うつ)ろな体だけになっていた。
太い丸太でつくった猛獣用の檻(おり)だった。
ぼくは、その格子につかまって、耳をすましたのだった。
憲兵どもは、直立不動で、顔を涙でくしゃくしゃにして聞いていた。
「玉音放送が、ぼくを虐殺から救ってくれた」
だが、なにもかも、まっくらだった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「歴史がひっくりかえり、天皇が人間にかえり、兵隊がいなくなる……そんな日本が生まれるのか……だが、おれたちは、これからどうなるんだろう……」

負けてほっとした心に、わずかな明るさがさしてきた。

牢獄の中からも、天皇の声は聞こえた。しみじみと訴えるような、どもりがちなことばだった。

その一言一句が、はらわたにしみこんでくる……日本は負けたんだ……あれほど平和を願っていたぼくが、どうして憲兵なんかといっしょになって日本が負けたことに泣き出したのだろう？

父の国が勝ったのだ……畜生……日本の軍国主義がカブトをぬいだんだ！……畜生！

ぼくはいつのまにか、焼けあとの、黄色な煙の鼻をつくにおいの中を、妻や子のいる教会へと歩いていった。

足の裏がまだ熱い。焼けて二日だというのに燃えている。

女房は、敵国のスパイかもしれないと、いくたびもつかまえられ、ついに憲兵隊にもっていかれた夫の留守をじっとまもっていた。が、B29は、容赦もなく、家を焼いてしまった。

青い焔の中からかの女は三人の子と、三つのものだけをえらんでもって逃げた。

「きっと、疑いが晴れて釈放されるにちがいないと思って……うちが焼けても、おいしいお茶だけは……と、思って……」

女房は、その日のために、玉露と、朱泥の急須と茶碗おけをもって逃げたという。
「ああ、もうこれからは、誰も死ななくていいのだ……」ただそれだけがうれしかった。

ラジオが久しぶりで天気予報を放送した。まるで日本に何年間も雨がふらず、日もささず、気候の変化もなかったように、アナウンサーの声は、気圧や風の方向の中でとまどいしているようだった。

やがて、終戦直後の放心状態から、少しずつ正気にもどっていった日本は、逞しい闇市場の発展と並行して、なにかしら、仕事らしいものの形を人々の生活に還元していった。

ぼくも出版屋さんを迎えるようになった。長いこと窒息させられてきたフランス文学、ことに発売禁止を食いつづけて来た自然主義の小説が狂ったようないきおいで復活し、ぼくはいつのまにかなつかしいモーパッサンやゾラやアナトール・フランスの長篇や短篇を数冊、翻訳していた。

ところが、どの訳書の前書きにも、必ず、「三河島ドン・ボスコ教会にて……訳者」と書くのを忘れなかったので、思いがけない事件がもちあがった。

モーパッサンやゾラやアナトール・フランスなどの作品は、カトリック教会が、「信者は読んではいけない」と、かたくいましめている禁書なのだ。

(ぼくが憲兵隊に引かれていったあと、家が焼け、妻子が途方にくれていた時、ちょうど三人の

幼い子を通わせていたドン・ボスコ教会の幼稚園の神父が、「教会の二階が広いから、一時の避難所としなさい……」といって、親切に妻や子を引きとって、住まわせてくれていたのであった）

教会で世話になっているにもかかわらず、恐るべく、汚らわしい小説を、平気で訳し世に出しているということは、ゆるすことのできない背教であり異端だというのである。信徒間はもちろん、上級司祭や司教たちから、大変な抗議がでた。

気の毒だったのは、ぼくの一家を、焼けあとから迎えてここに連れてきてくれたイタリアの神父さんであった。

「悪魔を神の家に住まわせた」というので、その神父さんは追放になり、多摩川辺の小さな教会に転属されてしまったのである。

そして、新たに赴任してきた神父は、あたかもぼくたち一家を追い出す使命を帯びて派遣された勢子（せこ）みたいな男だった。

「早く出ていってくれ」と、上手な日本語で、毎日のようにせき立てる。

そんな日の一日だった。

ザック……ザック……ザック……ときならぬ物々しい軍靴の音が入り乱れて近づいてきた。

恐る恐る窓からのぞいてみると、憲兵の腕章をつけた兵士が五、六人、大きな荷車をひいて、教会の門にさしかかる。そして、こっちの方へむかってきた。

それで、うちのまえでパタリッ！　と、とまったのだ。
「お父さん！　大変！　大変！　早くにげて！　憲兵よ！」
女房の唇は死人のように紫だった。
「ごめん下さい！　平野先生のお宅はこちらですか？」
敗戦のどさくさにばっさりやられるのかな？……とっさに、あの関東大震災のとき方々で虐殺された平沢計七以下七人……さらに進歩的な人々のことがさっと頭にうかんできた。
「ああ！　もうダメか……」目の前がパッ！　と、吉田松陰のシルエットでまぶしくなった。そして、辞世について考えた……女房がおろおろしているので、玄関のカーキ色達は、まだるっこしくなったらしく、
「先生はおいでですか……もしもし……もしもし……」と、だんだんと大声になってくる。
荷車をひいてきた……ということは、おれをその場で殺して、死体をもちはこぶためかもしれない！
「先生……隊長からの命令でまいりました……もしもし……お留守ですか？」
「あ、もうダメだ！……玄関をあけよう……いいから！　いさぎよく……出てやろう」
女房はまだ躊躇していた。三人の子どもたちも、びっくりして出てきた。
玄関の戸が、いきおいよく、ガラガラッとあけられた。どさりッ！　と重いものがおかれた……軽い地ひびきがする……。

「まあ！　お父さん！　米俵よ！」
女房が、のめるように敷台にとびおり、大声をあげた。
「あとで隊長がまいります。とりあえず、お受けとり下さい」
憲兵たちは、玄関の土間に米俵を四俵ほど積みあげると、慇懃に挙手の礼をして、帰っていった。
「白米よ！　お父さん！　どうしましょう……どうしましょう……」
女房のうわずった声がとたんに生き生きとしてきた。（女房がひどい脚気になって今日でも時時しびれたり、むくんだりするのは、戦争中の栄養失調に、俄然無限に供給されたこの素晴らしい白米のおかげである。さもしい話だが）

憲兵の姿が消えると、こんどは、入れかわり、エッサエッサと、なにかとても重いものをはこんでくる人の気配がした。
「後刻署長がごあいさつにあがります。先生なにかと御不自由でしょう。どうぞ、つまらぬものですが……」
顔みしりの特高刑事以下、係りの巡査たちが、人夫に手つだわせて、とてつもなく大きな鏡つきの彫刻をほどこした衝立と、スプリングのよくきいた豪華なダブルベッド……それから、いくつものバケツに山盛りの白砂糖、塩、味噌など、小売りのあきないができるほど、わんさとはこん

できたのである。
今日まで日本の中にこんなにものがゆたかにあったのか……と、思わず目をみはらずにいられなかった。
「かわればかわる世の中ねえ……」……女房が言葉を奪われたように、絶句……そしてためいき……。
「お父さんが何だか急にえらくなっちゃったみたいね」
ぼくは、一体これはどういうことなのか……どういうことになるのか……ただ、黙々と、なりゆきを見ているほかなかった。
子どもたちは大よろこび、さと史もレミもミカも、生まれてはじめて見るすばらしいベッドの上で、とんだりはねたりしている。
女房は鏡面に指をあてて、
「あら、とってもいい鏡だわ！　ガラスが、こんなに厚くって……きっとこれは舶来だわ！」
と、しきりに玻璃面をなでては感心していた。
やがて、憲兵分隊長と、署長とが、仲良く肩をならべてやってきた。
きちんと手をついて、「へへッ！」「ははッ！」と、昔の三太夫みたいにおじぎをした。
「あの節は……」
と、のどからすれすれの声を出した。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com